

## 孫世代の高齢者介護観と介助に対する自信

— 祖父母との親密性と介護経験との関連 —

藤若恵美\*<sup>1</sup> 進藤貴子\*<sup>2</sup> 永田 博\*<sup>2</sup>

### 要 約

本研究の目的は、祖父母との親密性と介護経験の両面から孫世代である大学生の介護観を検討すること、そして、孫世代が介護を実際にどの程度担うことができると考えているのかを介助に対する自信によって測定し、介護場面での孫世代の役割について検討することであった。その結果、祖父母との親密性が高い孫世代は、親密性の低い孫世代よりも家族介護意識と社会的介護意識の両方が高く、家族介護にとどまらず、介護を支援する社会資源にも目をむけていた。祖父母との親密性と介護経験の交互作用はいずれの介護意識においても認められなかった。また、孫世代は現時点で間接的な介助を行う自信があることが示され、介護場面において孫世代が重要な存在となり得ることが示唆された。

### 1. 問題

高齢化がすすむなかで、高齢者介護は避けることのできない重要な問題となっている。介護には様々な葛藤や心理的問題が伴い、なかでも家族介護によって生じる主介護者のストレスや介護負担感の問題が多く取り上げられてきた。これらの問題が生じる要因としては、要介護者の疾病の特徴や介護期間の長さなどいくつかの要因が考えられるが、そのうちのひとつとして介護に対する家族間の無理解や協力不足がある<sup>1,2)</sup>。小野寺・下垣<sup>3)</sup>は、介護者に補助介護者が存在しない場合、介護者がすべての負担を一人で抱え込んでしまう傾向にあり、結果として介護不能となる危険性を指摘している。

主介護者を支える家族としては、主介護者の配偶者や兄弟姉妹、子どもなどが考えられ、それぞれが主介護者や要介護者に対して働きかけていると考えられる。そのなかで、高齢者介護を支えるマンパワーとして、要介護者の孫世代が現在注目されている。親の傍らで祖父母の介護に関心をもっている孫世代は多く、孫が主介護者を支えながら介護に携わるケースはめずらしくない。老親の介護に直面したとき、主介護者となる親世代は落ち着いてその状況を受け止めることが困難であったり、嫁姑の確執など人間関係の問題から介護を受容することが難しい場合がある。しかし、孫世代は親世代に比べて要介護者である祖父母とのしがらみが少ないため、親世

代よりも冷静に祖父母の老いを受け止めることができ、介護に積極的に関わることができるのではないかとされている<sup>4)</sup>。このように、介護を支える力として孫世代の力があることが示されており、孫世代は主介護者を支える家族として、また今後主介護者となっていく者として、介護の現場で今後ますます意味のある存在となっていくと考えられる。しかし、孫世代の介護観、つまり、どのような介護形態を望ましいと考え、介護に対して自らがどのように関わっていこうとするのかについての研究は少なく、その実態は十分に捉えられていない。

孫世代の介護観については、介護保険制度をはじめとした社会的保障としての介護体制が整いつつある現在においても、家族を中心とした介護を大学生が重視していることが示されている<sup>5)</sup>。しかし、そのなかで高齢者介護の困難な様子を目の当たりにした経験のある孫世代については、介護者の苦労を実際に知っているため、あるいは介護される側の不満を感じとるために介護経験のない孫世代よりも介護の責任を社会にあると考えていることが示唆されている<sup>5,6)</sup>。介護経験があり、介護問題をより現実味をまして感じることでできる立場にある孫世代ほど、家族介護を厳しいものであると認識し、介護の担い手の中心を家族より社会にしていると考えられる。もしこのように考えることができるならば、孫世代の介護観に関連する要因のひとつとして介護

\*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 臨床心理学専攻 \*2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科  
(連絡先) 藤若恵美 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学  
E-Mail: mercredi\_ebi@hotmail.com

経験を想定することができる。

介護経験に加えて、孫世代の介護観を規定する要因として祖父母との関係がある。山根・池<sup>7)</sup>は女子短大生に調査を行った結果、多くの者が老親の介護に肯定的であり、その背景に家族との情緒的なつながりがあると示唆している。また、別の女子短大生を対象におこなった調査<sup>8)</sup>においても、幼少期(小学校就学前)に祖父母に世話になったと感じている者はそうでない者より“親の老後の世話をするのは当たり前だ”と回答する傾向が強いことが示唆されている。

以上のことから、大学生の介護観に関連する要因として介護経験と祖父母との関係があり、それぞれが孫世代である大学生の介護観に関連していると考えられる。しかし、先行研究はいずれも祖父母との関係と介護経験のどちらか一方についての検討にとどまり、両要因の相互作用については検討していない。祖父母との関係が良く、介護経験もある場合、根底には家族介護を望む介護観がありながらも、その後の介護の経験によって家族介護の厳しさを知り、葛藤が生じることも考えられる。したがって、祖父母との親密性の高さがそのまま家族介護観を高めず、介護経験によってむしろ逆に低下させ、社会的介護観を高めるということもあり得る。本研究は、この点について両要因の交互作用の有無の視点から検討する。

本研究では、さらに、孫世代が介護を実際にどの程度担うことができると考えているのかを彼らの介助に対する自信によって測定する。その目的は、大学生の介護観についての先行研究が主に大学生が将来介護者となったときの介護形態の選択といった介護観についてのみを扱っているからである。前述したように大学生は主介護者を支える家族としてもすでに重要な存在であり、実際の介護場面での孫世代の役割をどのように認識しているのかについても検討する必要がある。

## 2. 方法

### 2.1. 対象者

調査対象者は大学生344名であった。回答が不適切であったものを除いた321名(男性85名、女性236名)を有効回答(有効回答率93.31%)とした(平均年齢=19.44歳,  $SD = 1.34$ )。

### 2.2. 質問紙の構成

フェイスシート(年齢、性別、学科、家族介護への参加の有無)と以下の3尺度から構成される調査票を用いた。

家族介護への参加の有無については、「これまで介護が必要な家族の介護をしているところをみたり、介護の手伝いをしたことがありますか」という問いに対し、選択肢(1:自分が主に介護をしていた, 2:介護に積極的に参加した, 3:たまたま介護に参加した, 4:家族のだれかが介護しているのをみたことはあるが手伝ったことはない, 5:家族が介護していることは知っているが直接その様子を見たことはない, 6:家族が介護しているのをみたことがない, 7:その他)による回答を求めた。

選択肢のうち1, 2, 3と回答した者を「介護参加群」( $N=88$ ), 4と回答した者を「介護不参加群」( $N=36$ ), 5, 6, 7に回答した者を「介護みたことなし群」( $N=197$ )とした。

2.2.1. 祖父母との親密性尺度 祖父母親密性尺度16項目<sup>9)</sup>を因子分析したところ、3因子が抽出された<sup>1)</sup>。そのうち、本研究の目的に合致すると考えられた第I因子「愛情の双方向性」10項目を祖父母との親密性尺度として用いた。これは“両親と共に祖父母も、私を育ててくれた”、“祖父母は私と過ごす時間を可能な限り十分にとってくれている(くれていた)”、“私は祖父母に抱っこしてもらったり祖父母と手をつないだりなど祖父母と触れ合うことが好きだ(好きだった)”のような項目からなる。回答形式は「当てはまる(4点)」から「当てはまらない(1点)」の4件法で、得点が高いほど祖父母との親密性が高いことを示す。

2.2.2. 介護観評価尺度 桂・佐竹<sup>10)</sup>が用いた“介護に関心がある”、“介護は家族で行うことだ”といった介護に関する認識8項目に唐沢<sup>11)</sup>の家族介護意識尺度4項目(“介護は家族で行うのが望ましい”、“お年寄りの介護は家族の義務である”、“お年寄りが家族介護を希望すれば家族の手で介護すべきである”、“家族で介護するのがお年寄りにとって幸せである”)と介護の社会化尺度2項目(“家族ではなく社会全体で介護を支える必要がある”、“介護は家族でなく社会で行うのが望ましい”)を加え、内容の重複する項目を統合した全部で13項目の質問群(以下、介護観評価尺度と示す)を用いた。「非常にそう思う(4点)」から「全くそう思わない(1点)」の4件法で回答を求めた。

家族介護意識尺度と介護の社会化尺度について、唐沢<sup>11)</sup>は一つの態度尺度上の対極をなすものではなく、別の尺度として捉えている。そこで本研究においても両尺度が相反するものではない、両立可能な尺度であるという認識のもとで本尺度を用いた。

2.2.3. 介助に対する自信の測定尺度 鈴木ら<sup>12)</sup>の同居家族療養時の介護内容として示された

具体的な介助17項目のうち、一般的な家事として介護に関係なく日ごろ行われると考えられる“食事作り”と“洗濯”の2項目を除外した15項目を用いた。“食事の介助”や“体位変換”などといった身体面の直接的援助領域に加え、“買い物の代行”や“介護者の相談相手になる”といった間接的援助領域を含む全15項目に対して、どの程度行う自信があるかを「できると思う(4点)」から「できないと思う(1点)」の4件法で回答を求めた。得点が高いほど、その介助を行う自信があることを示す。

### 2.3. 調査手続きと倫理的配慮

調査は2007年7月に実施した。倫理的配慮として、質問紙配付時に書面および口頭にて研究目的とプライバシーの保護、研究目的以外にデータを使用しない旨の説明を行い、本調査への同意と自由意志に基づく無記名回答を求めた。回答所要時間は10分程度であった。

## 3. 結果

### 3.1. 介護観評価尺度の因子構造

今回使用した介護観評価尺度は異なる3種の尺度を合成したものである。さらに本研究の目的は、介護観を構成していると考えられる種々の介護意識を祖父母との親密性と介護経験から説明しようとするため、まず介護観評価尺度の因子構造を特定しようとした。

介護観評価尺度13項目について、因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った(使用ソフトはSPSS 16.0J for Windows)。固有値の変化と因子の解釈可能性を考慮すると4因子構造が妥当であると考えられた。因子負荷が複数の因子において.40以上となった項目、あるいはいずれの因子においても因子負荷が.40に満たなかった項目を分析から除外

して繰り返し同様の因子分析を行い、最終的に11項目を採択した。回転後の最終的な因子負荷量を表1に示す。

第I因子は4項目で構成されており、“介護は家族の手で行うのが望ましい”、“家族で介護するのが高齢者にとって幸せである”など、介護を家族で行うことに関する内容の項目で高い負荷量を示していた。そこでこの因子を「家族介護意識」と命名した。

第II因子は“介護はやりがいがある”、“介護で介護者も成長する”、“介護に関心がある”の3項目で構成されており、介護を肯定的に認識していることを表す因子であると解釈された。そこで、この因子を「肯定的な介護意識」と命名した。

第III因子は“介護は家族ではなく社会で行うのが望ましい”、“家族ではなく社会全体で介護を支える必要がある”の2項目で構成されており、介護は社会支援により支えられるべきであるという意識を表す因子であると解釈された。そこで、「社会的介護意識」と命名した。

第IV因子は“介護は女性がやることだ”、“社会資源の利用に抵抗がある”の2項目で構成されていた。介護に対する古くからの考えや保守的な態度を表す因子であると解釈された。そこでこの因子を「介護に対する保守意識」と命名した。

尺度全体の信頼度を示すCronbachの $\alpha$ 係数は.74であり、各因子については第I因子.79、第II因子.71、第III因子.48、第IV因子.40であった。これらの因子分析に基づき、各因子の項目得点の合計値をそれぞれの介護意識得点とし、分析に用いた。第III因子、第IV因子は上記のとおり十分な信頼性係数の値を得られなかったが、補足的に分析に用いることとした。

表1 介護観評価尺度の因子分析結果

項目	I	II	III	IV	共通性
介護は家族の手で行うのが望ましい	.82	.24	-.07	.23	.79
家族で介護するのが高齢者にとって幸せである	.65	.20	.05	.12	.48
高齢者が家族介護を希望すれば、家族の手で介護すべきである	.63	.16	.03	.01	.43
高齢者の介護は家族の義務である	.50	.34	-.12	.16	.41
介護はやりがいがある	.16	.86	.01	.08	.76
介護で介護者も成長する	.31	.56	.06	-.12	.43
介護に関心がある	.23	.52	.12	.04	.34
介護は家族でなく社会で行うのが望ましい	-.09	.05	.84	.07	.56
家族ではなく社会全体で介護を支える必要がある	.18	.36	.42	-.38	.53
介護は女性がやることだ	.05	-.01	-.02	.52	.26
社会資源の利用に抵抗がある	.22	.05	.05	.48	.30
固有値	2.01	1.70	.92	.77	
寄与率	18.31	15.42	8.34	6.98	

### 3.2. 祖父母との親密性および介護参加の経験からみた介護観

祖父母との親密性の高さおよび介護参加の経験と介護観の関係を検討するために、祖父母との親密性尺度得点を平均し、平均値をもとに親密性高群と親密性低群の2群に分けた(高群166名:平均=36.06,  $SD = 2.55$ ; 低群155名:平均=26.06,  $SD = 4.69$ )。介護参加群は88名, 介護不参加群は36名, 介護みたことなし群は197名だった。この2変数(祖父母との親密性: 高群, 低群; 介護経験: 介護参加群, 介護不参加群, 介護みたことなし群)の組合せによってできた6群それぞれの介護観評価尺度得点(以下, 介護意識得点とする)を表2に示す。祖父母との親密性の高さや介護参加の程度を独立変数, 介護意識得点を従属変数とする2要因の分散分析を行った。

3.2.1. 家族介護意識 交互作用は認められず, 祖父母との親密性の主効果のみが有意であった [ $F(1,315) = 15.27, p < .01$ ]。祖父母と親密で情緒的なつながりのある者の方が家族による介護を考える傾向が強かった。

3.2.2. 肯定的な介護意識 交互作用は認められず, 祖父母との親密性の主効果が有意であった [ $F(1,315) = 13.93, p < .01$ ]。祖父母との親密性高群が低群よりも肯定的な介護意識をもっていた。また, 介護参加の有無の主効果も有意であり [ $F(2,315) = 5.23, p < .01$ ], 介護参加群が他の2群よりも介護を肯定的に考えていた。

3.2.3. 社会的介護意識 交互作用は認められず, 祖父母との親密性の主効果 [ $F(1,315) = 9.02, p < .01$ ], 介護参加の有無の主効果 [ $F(2,315) = 3.18, p < .05$ ] がそれぞれ有意であり, 祖父母との親密性高群は低群に比べ, 介護参加群は介護みたことなし群に比べて, 介護は社会で支えられるべきだと考えていた。介護参加群と介護不参加群, 介護不参加群と介護みたことなし群の間に差はなかった。

3.2.4. 介護に対する保守性 いずれの変数の主効果, 交互作用も認められなかった。介護に対する保守性得点の範囲は2~8点であり, どの群においても平均値が4以下と低かった。

### 3.3. 祖父母との親密性および介護参加の経験からみた介助に対する自信

祖父母との親密性の高低および介護参加の経験と介助に対する自信との関係を検討するために, 祖父母との親密性尺度得点の高低と介護参加の程度から同様に6群に分け, 群ごとに15種それぞれの介助に対する自信得点の平均値を算出した(表3)。

祖父母との親密性の高さや介護参加の経験を独立変数, 15種それぞれの介助に対する自信得点を従属変数とする2要因の分散分析を介助項目ごとに行ったところ, 交互作用はいずれの項目においても有意でなかった。「体位変換」「服薬介助」「症状観察」を除く12項目で祖父母との親密性の主効果が有意であり[食事介助:  $F(1,315) = 7.72, p < .01$ ; 着替え:  $F(1,315) = 11.36, p < .01$ ; 排泄介助:  $F(1,315) = 5.97, p < .05$ ; 身体を拭く:  $F(1,315) = 20.31, p < .01$ ; 入浴介助:  $F(1,315) = 12.52, p < .01$ ; 病院同行:  $F(1,315) = 5.11, p < .05$ ; 散歩の同行:  $F(1,315) = 7.00, p < .01$ ; 話し相手:  $F(1,315) = 5.86, p < .01$ ; 介護者の話し相手:  $F(1,315) = 19.43, p < .01$ ; 買い物:  $F(1,315) = 11.81, p < .01$ ; 介護の代行:  $F(1,315) = 14.96, p < .01$ ; 掃除:  $F(1,315) = 4.91, p < .05$ ], 親密性高群が親密性低群よりもそれぞれの介助を行う自信をもっていた。

また「排泄介助」 [ $F(2,315) = 3.85, p < .05$ ], 「服薬介助」 [ $F(2,315) = 11.44, p < .01$ ], 「病院同行」 [ $F(2,315) = 2.82, p < .10$ ], 「散歩の同行」 [ $F(2,315) = 3.48, p < .01$ ] の4項目においては介護参加の程度の主効果が有意であった。介護参加群はみたことな

表2 祖父母との親密性と介護参加の経験ごとの平均介護意識得点

介護意識得点	親密性高群			親密性低群		
	介護参加 (N=55)	介護不参加 (N=17)	みたことなし (N=94)	介護参加 (N=33)	介護不参加 (N=19)	みたことなし (N=103)
家族介護意識	13.00 (2.41)	13.00 (1.66)	12.61 (2.13)	11.82 (1.59)	11.63 (1.77)	11.54 (2.38)
肯定的な介護意識	10.25 (1.27)	9.52 (1.97)	9.69 (1.65)	9.45 (1.39)	8.74 (1.63)	8.66 (1.86)
社会的介護意識	6.75 (.91)	6.94 (1.03)	6.40 (1.10)	6.63 (.90)	6.26 (1.10)	6.12 (1.13)
介護に対する保守性	3.55 (.88)	3.53 (1.01)	3.68 (1.19)	3.58 (1.03)	3.42 (.61)	3.59 (1.07)

各尺度得点の最大値: 家族介護意識 (16), 肯定的な介護意識 (12), 社会的介護意識 (8), 介護に対する保守性 (8)  
カッコ内: SD

表3 祖父母との親密性と介護参加の経験ごとの介助に対する平均自信得点

介助項目	親密性高群			親密性低群		
	介護参加 (N=55)	介護不参加 (N=17)	みたことなし (N=94)	介護参加 (N=33)	介護不参加 (N=19)	みたことなし (N=103)
食事介助	3.42 (.63)	3.24 (.56)	3.26 (.66)	3.15 (.80)	2.89 (.81)	3.03 (.76)
着替え	3.25 (.75)	3.12 (.70)	2.91 (.76)	2.73 (.76)	2.74 (.65)	2.76 (.75)
体位変換	3.22 (.76)	2.88 (1.05)	3.02 (.78)	2.91 (.77)	2.89 (.88)	2.77 (.80)
排泄介助	2.71 (.88)	2.41 (.94)	2.43 (.84)	2.45 (.67)	2.05 (.85)	2.17 (.86)
体を拭く	3.51 (.57)	3.41 (.80)	3.32 (.66)	3.06 (.71)	2.89 (.66)	2.90 (.83)
入浴介助	2.78 (.85)	2.65 (.93)	2.62 (.89)	2.42 (.79)	2.05 (.78)	2.27 (.87)
服薬介助	3.65 (.58)	3.06 (.75)	3.29 (.68)	3.52 (.57)	3.11 (.46)	3.07 (.82)
症状観察	3.13 (.75)	2.88 (.60)	3.03 (.80)	3.06 (.70)	2.79 (.79)	2.87 (.91)
病院同行	3.62 (.68)	3.47 (.62)	3.54 (.60)	3.55 (.51)	3.21 (.54)	3.24 (.76)
散歩の同行	3.82 (.39)	3.65 (.79)	3.65 (.54)	3.61 (.50)	3.47 (.61)	3.36 (.73)
話し相手	3.91 (.29)	3.88 (.33)	3.79 (.41)	3.58 (.56)	3.53 (.51)	3.45 (.64)
介護者の話し相手	3.65 (.55)	3.59 (.71)	3.61 (.59)	3.24 (.66)	3.26 (.45)	3.17 (.70)
買い物	3.84 (.42)	3.88 (.33)	3.83 (.38)	3.67 (.48)	3.63 (.60)	3.51 (.64)
介護の代行	3.51 (.61)	3.47 (.51)	3.39 (.61)	3.21 (.55)	3.05 (.52)	3.05 (.75)
掃除	3.76 (.51)	3.59 (1.00)	3.69 (.53)	3.55 (.56)	3.53 (.61)	3.38 (.72)

カッコ内：SD

し群よりも「排泄介助」、「病院同行」、「散歩の同行」を行う自信をもち、介護参加群は介護不参加群とみたことなし群より「服薬介助」を行う自信をもっていた。

#### 4. 考察

本研究の第1の目的は、祖父母との親密性と介護経験の両面から孫世代である大学生の介護観を検討することであった。分析の結果、これら2要因と各介護意識の関連について以下のような知見が得られた。

家族介護意識に関しては、祖父母との親密性が高い孫世代が親密性の低い孫世代よりも家族介護意識が高かった。この結果は、先行研究<sup>7,8)</sup>同様であり、祖父母との親密性が高い孫世代は介護や祖父母をより身近なものとして自身の生活の流れのなかに組み込んで考えているのではないかと推察される。つまり、祖父母が近い存在であるほど、家族による介護に価値を見出していると考えられる。それに対し、介護参加の経験によって家族介護意識が異なることはなかった。家族介護意識は介護参加の経験には左右されず、祖父母との親密性によって異なることが明らかとなった。

肯定的な介護認識については、祖父母との親密性と介護参加の経験の両要因が関連していた。祖父母

とより親密である孫世代は、祖父母の生活の質や快適さをより身近に感じ取ることから介護への動機づけが高まり、介護をやりがいのある肯定的なものであると認識する傾向にあると考えられる。また、介護参加の経験がある孫世代が介護に対して肯定的であったという結果は、介護に参加することで介護に自信を持ち、自身の成長を感じたことによって介護への動機づけが高まった結果であると理解できる。これは、本研究における孫世代の介助に対する自信の自己評価において、介護参加の経験をもつ孫世代が経験のない孫世代に比べ、介助に対する自信の自己評価が高かったことにも一致する。

社会的介護意識については、先行研究<sup>5,6)</sup>と同様に介護参加の経験のある孫世代は社会的介護意識が高く、介護は社会で支えられるべきであると考えていた。また、本研究では、祖父母と親密性の高い孫世代も社会的介護意識が強かった。祖父母と親密である孫世代が介護の担い手を社会においているという結果は、前述の家族介護意識の高さと矛盾しているように思われる。しかし、家族介護と社会的介護は単純に相反するものではない。社会的介護には、施設入所といった家族から比較的離れた場所での介護以外にも、家族介護をしながら利用するデイサービスや訪問介護といったサービスも含まれている。これらを有効に利用することは、家族介護の質と効

率を上げることにつながる。ここから、祖父母との親密性が高い孫世代は家族介護意識と介護の社会化意識の両方が高いという本研究の結果は、祖父母と親密であることで介護に対する意識が高まり、家族介護のみにこだわらず、介護を支援する社会資源を積極的に利用していこうとしていると考えられる。

介護に対する保守性に関しては、どの群も平均値が4以下と低かった。このことから、孫世代は介護を女性が行うものだと考えたり、社会資源の活用に抵抗があるとはもはや考えていないと推察される。

本研究では、祖父母との親密性と介護経験の交互作用はいずれの介護意識においても認められず、祖父母との親密性と介護経験の両要因は孫世代の介護意識に対して互いに独立して関連していることが示された。これは、大学生の介護観の決定には、介護が必要になる以前からの祖父母との間に生じる親密性が関連し、祖父母との関係のなかで形成された介護観はその後の介護経験によって左右されることが少ないことによると理解できる。つまり、本研究の結果からみる限り、祖父母との親密性の高さはそのまま家族介護意識を高め、介護経験によって低下させられることはないようである。

本研究の第2の目的は、介護場面での孫世代の役割について検討するために、孫世代が介護を実際にどの程度担うことができているのかを彼らの介助に対する自信によって測定することであった。結果から、祖父母との親密性の高低によって12種の介助に対する自信得点に有意な差が認められ、祖父母との親密性が高い孫世代は低い孫世代よりも介助を行う自信があることが明らかとなった。介護観と同様に、介助に対する自信にも祖父母との間に親密な関係が形成されていることが関係し、家族介護を支える要因となっていると考えられる。また「排泄

介助」、「服薬介助」、「病院同行」、「散歩の同行」の4介助項目においては、介護参加経験群で介助への自信が高かった。この4介助項目は今回取り上げた介助項目のなかでも、経験による差が顕著にあらわれる項目であったと考えられる。

本研究の対象者である孫世代は、自分を主介護者としてみるのではなく、主介護者を支える補助介護者という役割で自らを認識していると思われる。このことは、15種の介助のなかでも病院の同行や被介護者の話し相手、介護者の話し相手、買い物の代行といった間接的な介護行動において得点が高くなっていることから示唆される。

以上のことから、介護場面における補助介護者としての孫世代の役割について再度注目したい。孫世代は、入浴や排泄介助といった直接的な介助はできないとしても、他の場面で十分に主介護者を支えることができると考えられる。介護場面において孫世代が重要な存在となり得ることが、本研究によっても明らかとなった。

## 5. 研究の限界と今後の課題

本研究では先行研究<sup>10,11)</sup>に基づき、4因子からなる介護観評価尺度を構成した。しかし、今日における高齢者介護のあり方は家族介護と社会的介護の双方を組み合わせた、より包括的な介護へと形を変えていると考えられ、この状況を本研究における尺度構成のみでは十分に捉えることができなかつたことも考えられる。実際に本研究で得られた介護観評価尺度の因子分析の結果でも、十分な水準の累積寄与率や共通性が得られなかつた。高齢者介護の現状に即した介護観の構成や評価尺度について、今後さらに検討する余地が残っている。

## 注

†1) 祖父母親密性尺度<sup>9)</sup>16項目を因子分析(主因子法,直接オブリミン回転)した結果,第I因子「愛情の双方向性」(固有値6.35),第II因子「祖父母の尊重」(固有値4.49),第III因子「祖父母の魅力」(固有値2.04)の3因子が抽出された。このうち,本研究で扱おうとする祖父母との親密性の概念に合致するものとして第I因子である「愛情の双方向性」を採択し,祖父母との親密性を捉える尺度として用いた。

## 文 献

- 1) 天谷真奈美,大塚真理子,島田広美,星野純子,青木由美恵:痴呆性高齢者を介護する娘介護者の危機.埼玉県立大学紀要,4,87-93,2002.
- 2) 渡辺俊之:介護者と家族の心のケア 介護家族カウンセリングの理論と実践.初版,金剛出版,東京,2005.
- 3) 小野寺敦志,下垣光:痴呆性老人の家族カウンセリングに関する研究 介護上の問題点へのストラテジー.心理臨床学研究,16,36-45,1998.

- 4) 産経新聞(オンライン): 介護を変える“孫力”…「しがらみなく冷静になれる」. 産経新聞, 2007. 2007年10月8日.  
<<http://sankei.jp.msn.com/life/welfare/071007/wlf0710071128000-n1.htm>>
- 5) 原鉄哉, 横山英史: 青年層の高齢者扶養意識と在宅介護の展望 — 専門学校生に対する意識調査を通して — . 東北福祉大学院研究論文集, 1, 1-9, 2003.
- 6) 和田由香, 今高國夫: 少子高齢化社会に対する思春期の意識調査. つくば国際短期大学紀要, 32, 103-112, 2004.
- 7) 山根律子, 池弘子: 老親の介護に関する若年女性の意識 — 介護を担うことに対する態度の決定要因 — . 社会老年学, 35, 57-65, 1992.
- 8) 知野愛: 女子短大生の家族観について(1) — 老親介護観と幼少期の祖父母関係を中心に — . 郡山女子大学紀要, 42, 21-31, 2006.
- 9) 番匠さやか: 祖父母 — 孫の親密性および交流頻度と孫の自己受容との関連について. 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科2005年度卒業論文(未公開), 2006.
- 10) 桂晶子, 佐竹佑紀: 壮年期の人々の介護意識 — 男女間の意識の違いに注目して — . 日本看護学会論文集 老人看護, 32, 44-46, 2001.
- 11) 唐沢かおり: 家族メンバーによる高齢者介護の継続意志を規定する要因. 社会心理学研究, 22, 172-179, 2006.
- 12) 鈴木和子, 渡辺裕子, 野口美和子, 湯浅美千代, 佐藤弘美, 佐藤禮子, 山岸春江: 高齢者を支える看護・介護の意識と技術. 初版, 日本看護協会出版会, 東京, 22-35, 1999.

(平成21年10月31日受理)

## Grandchildren's Perspectives on Caring for the Elderly and their Confidence in Caring: the Influence of Intimacy with Grandparents on the Caring Experience

Emi FUJIWAKA, Takako SHINDO and Hiroshi NAGATA

(Accepted Oct. 31, 2009)

Key words : grandchildren's perspectives on caring for the elderly, confidence in caring, intimacy with grandparents, caring experience

### Abstract

This study investigated the influence of university students' (N=321) level of intimacy with their grandparents and their own caring experience on their perspective on caring for the elderly and their confidence in performing caring activities. Findings showed that students with greater levels of intimacy rated both home-based and formal or paid care services more desirable and were more positive in caring for the elderly and more confident in performing caring activities compared with those lower levels of intimacy. Grandchildren with more caring experience perceived formal or paid care services to be more desirable and were more positive in caring and more confident in doing caring activities. These findings were discussed in relation to the important role grandchildren assume in helping their parents to care for the elderly.

Correspondence to : Emi FUJIWAKA

Master's Program in Clinical Psychology  
Graduate School of Health and Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
E-Mail: [mercredi\\_ebi@hotmail.com](mailto:mercredi_ebi@hotmail.com)

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.19, No.2, 2010 351-357)